2015・2号

直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

37号
2015・12-2016・6

◉特集◉

物語に見える「直江の津」のかたち

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

鉛色のそらの物語

「直江津うまれの直江津育ち…」と、躊躇(ためら)いもなく言える今

国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける

春日山城と越後府中❷

―春日山城国史跡指定八〇年によせて―

歴史は「今日」への手紙

関東管領上杉憲政を顕彰する人たち

鉛色のそらの物語

―「直江津うまれの直江津育ち……」と、躊躇(ためらい)なく言える今―

保坂清美

昭和四〇年代、直江津新町通りの賑やかな街の営みは今でも鮮明に記憶に残っています。商店街は活気に満ち溢れ往来も多く、〈直江津銀座〉ともでも言いましょうか、一三八軒もの商店が大集結し、真っ黒な煙をあげて通るバスはいつも満員でした。

ある日、街を歩いていると突然、黒い背広を着たおじさんが、「なぁ母ちゃん、毎日が鉛色の空だ！　こんな北風に向かって、吹雪いても足を運んでくれるお客さんがいるんだよ！　感謝しなきゃならんね！」と母に。同じ町で海や港で建設業を営むIさんの言葉です。

幼心に直江津の空の色など敢えて確認したことはなかったのに、その言葉が不思議に印象強く脳裏に焼き付きました。鉛色……。〈ねずみ色〉は習ったが〈鉛色〉とは、慌てて空を見上げました。来る日も来る日も鉛色……。毎日通う通学路から見る街並みや、あの丸専デパートの勢いからは想像もつかない色でした。

あれから三〇年。街は急速に表情を変え商店街も変化し、現在商店数は三二軒、当時の六分の一に。

このまちの、そんな両面を知っている世代は私たちが最後かと……。

＊

ずっと、私の中では直江津の見え方がどうも偏り、直江津の人、直江津育ち、という話にはなぜか気持も〈鉛色〉。商売屋育ちの私は家業を手伝いながら、女性の生き方や子育て、社会的立場を色々と考えるようになりました。三二歳のころ、人生のターニングポイントが訪れ、当時の仕事が漸進し現在の不動産業に。自ら商店街に店を張り商いの拠点として開業。自分の育った地域であり、何より多くの知り合いがいるからという安直な考えからでした。

仕事柄、先代の関わった建築物などに興味関心を持つようになりました。そのころ直江津生まれの直江津育ちのSさんとの出会いがあり、私は刺激され大きく影響を受けました。親や祖父、縁類から聞く直江津こぼれ話はSさんとの因縁を裏付け、時を経て明治や大正時代に遡るご縁が、私の心を擽られたことが事の始まりでした。

歴史を学び、同時に旧高橋回漕店（旧直江津銀行）の利活用や、三八朝市やその周辺の活性化のお手伝いをするようになりました。自らの足で歩き巡る直江津。想像をはるかに超える物語の宝庫。時代はどんどん遡り、安寿と厨子王、芭蕉、千代垣素直、福永十三郎等々…。歴史・文化の表面的な物だけではなく、「なぜ直江津だったのか」と、深く考え学ぶ場面に出会えた事が大きな宝物に。今まで蔑ろにしていた、生まれ育った地の深さを心の奥から感じました。

いま、本業の現況から見える時代の様相は〈終う〉が旬であり、現実的なカテゴリーになってきました。墓・家・相続など、お客様のニーズと時代背景とが大きく関わる今日。そのような仕事の中で地域・お蔵・家・土地から、まちの息遣いや物語を知る時があります。

「ここはね、その昔、漁師ばかりで、船小屋があってね、そっから先は砂浜で…、そうそうこの家の隣が番小屋だよ」と、当時を懐かしく語るお客さま。へ〜とお聞きしながら、すでに私の頭の中は、もうモノクロの世界、鉛色の画面。登場人物や風景、当時の風がリアルに蘇る。

先祖代々の家や土地は、時代を見てきた〈まちの語り部〉的な存在。〈終う〉ことから新たに結ばれるご縁。今までとは想像もつかない舞台（場面）に遭遇できるのもこの仕事の魅力の一つ。なんとも幸せな仕事だと思う今日この頃です。

＊

まちのこと仕事を通して見えてきたこと、あれやこれや様々な刺激を五感で感じてきたものを、さて、後世にどう伝えようかと頭を抱えていたとき、Sさんを中心に〈まちおこし直江津〉を立ち上げました。仲間はみんな直江津人。直江津のまちのなりたちや性格、歴史や文化をまとめ、子ども達の地域学習への一助として『なおえつものがたり』（かたち編・物語人物編）の二冊を刊行。大人の地域学習も開催しました。

「物語から直江津を考える機会を」と始めた会も、はや四年が経過。若いエネルギーと先人のぬくもりをもらい、「直江津じゃぁ自慢の鉛色の空」、「荒れ狂う日本海には胡桃もあるよ」という地域の温かさと人情、もう一つ欲張って、この際、歴史も文化も……、しかし浜っ子らしく気取らない授業をと、小中学校の地域学習に子ども達と奮闘中です。

どこまで伝わるかな……、鉛色のそらの物語



ほさかきよみさん
直江津（荒川町）生まれ、上越市直江津在住。
リアルエステイトＺｅｓｔ代表。不動産業・住宅・店舗企画・宅地建物取引士・二級建築士。まちおこし直江津事務局・ＬＬＣまちみらい直江津社員・ＮＰＯ女性みちみらい上越理事。固定資産税評価審査委員・直江津中央商店街理事。という活躍ぶりだけではなく、ちょっと涙もろい肝っ玉母さんでもあります。

特集

物語に見える「直江の津」のかたち



直江津を人買船の出でぬとて
　ふためきて追ふ山の雲かな
　　与謝野晶子（草の夢）
浅葱暖簾のかげに爪弾く晝の三味
　ここは直江の津なる浜通り
　　吉野秀雄（早梅集）

と詠われ、人買いが出入りする湊、人々が行き交い猥雑な風が流れる直江の津。海が荒れれば「丹後の人買い船が入った」と噂する「物語のまち」として、近代にいたっても歌人たちの心に深く沈み込んで生きる「直江の津」とは。

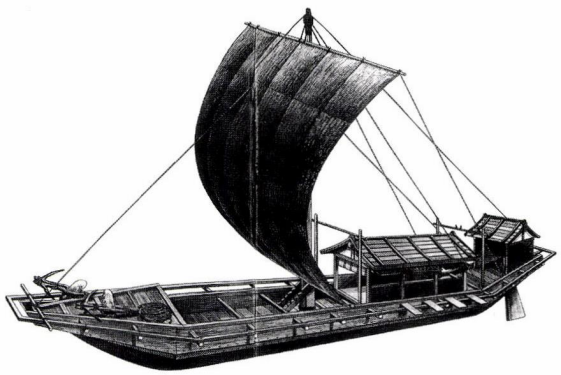
その姿を室町時代の物語や紀行文から探ってみる。

室町時代の海運

室町時代に成立したとされる海洋法規「廻船式目」に三津七湊の一つとして「今町湊」が登録されている。衝突事故、積荷の損害補償、漂着船の処理などが規定されていて、海上での決まりを作らなければならないほど海運が盛んであったことを示すものである。

「太平記」（巻二）にも、阿新丸（くまかわまる）が俊基の仇を討って佐渡を脱出するとき、山伏が現れて「湊には商人舟ども多く候へば、乗せて奉って、越後、越中の方まで送りつけまいらすべし…」とある。これは佐渡に商人の船が多くあり、越後でも越中にでも思いのままに乗せてやろうということである。上越地域に大量に残された珠洲焼や越前焼、常滑焼も、このような盛んな海運によって運ばれて来たものであろう。

貞応二（一二二三）年に成立したとされる「廻船式目」にある〈今町〉は近世の地名であるため疑問視する向きもあるが、近世に至るまで海洋法規として運用され、書写する段階で近世の「今町」に書きかえたと考えてもよいのではないだろうか。



「北野天神縁起絵巻」などに描かれた鎌倉時代の船
（広島県立博物館図録より）

物語の作者が描く直江の津

都から見れば僻遠の地である越後の「直江の津」あるいは「直江の浦」―「江」はほとんど「い」と発音している―が物語の地として登場するのは、陸路はもちろんであるが、海運による盛んな物流とともに、大量の土地の情報が都へもたらされた結果であろう。

それらの情報を運んだ人たちの見た直江の津は、先の「廻船式目」でもわかるとおり「湊のまち」であり、「都市」としての景観が広がっていたと想像される。

また、「義経記」〈北国落ち〉の冒頭の弁慶の言葉にもあるように、直江の津を日本列島の東西文化の接点として認識していたと思われる。これは、直江津にコンパスの針を置いて一周すると、日本列島がすっぽり入る（上越市学芸員中西氏案）のを見てもわかることである。

直江の津のかたち

説経節「さんせう太夫」の直江の津

直江の津を舞台にした、もっとも有名な物語は、説経節「さんせう太夫」に代表される安寿と厨子王の物語であろう。

説経節とは、仏法を広く庶民に伝える語り物で、後に三味線の伴奏によって説経浄瑠璃と呼ばれる娯楽性の強い語りに変わったものもある。

ただ今、語り申す御物語、国を申さば丹後の国、金(かな)焼地蔵(やきじぞう)の御本地(ごほんじ)をあらあら説きたて広め申すに、これも一度は人間にておわします。人間にての御本地を尋ね申すに、国を申さば奥州日の本の将軍、岩城の判官正氏殿にて……。

と始まる物語「さんせう太夫」は、丹後の国の金焼地蔵の由来を語る話である。

金焼地蔵は、じつは岩城の判官正氏としてこの世に現れたという話で「本地物」と言われ、厨子王の危機を救う身代わり地蔵として物語が展開する。

父岩城の判官の汚名をそそぐために都へのぼる一行が見た直江の津とはどんなものだったのだろうか。

岩城国を旅立った一行は、日の傾く直江の津（「さんせう太夫」では直江の浦）に着き、うばたけが一夜の宿を探しに出かける。しかし「直江千軒の所」宿を貸す家は一軒も無いと嘆いていると、浜から帰る女が「越後の



さんせう太夫一代記「鳴子の段　親子対面の段」
演者　若松流・三代目若松若太夫
平成14年11月9日、真行寺を会場に開催
主催上越TMO（直江津まちづくり協議会）・上越商工会議所

中世のまち　一乗谷遺跡



国直江の浦こそ、人売りがあるとの風聞なり」、宿を貸す者があれば地頭に罰せられるのだと教えてくれる。

「千軒」とは、商人などが集住する大きなまちで、海や河川などに津や泊といわれる物流拠点があり、日常的に「市」が立つような都市、広島県福山市の「草戸千軒」遺跡のような景観であったと想像できる。

続けて女は、この先に「逢岐の橋」という広い橋があるから、その下で一夜を明かしたらどうかと教えてくれる。

この逢岐の橋（往下橋）は、上杉景勝の慶長二（一五九七）年「越後国絵図」にも大きく描かれていて、新潟労災病院のあたりに架けられていたと考えられている。



「越後国絵図・頸城郡」（関川の左岸は欠落）
地図左の往下川に橋が見える（見やすいように北を上にしてある）
（掘り起こされた中世の村図録より）



復元された「草戸千軒」（広島県立博物館図録より）

延徳三（一四九一）年、室町幕府の管領細川政元が関白冷泉為広卿とともに越後府中を訪れたときの為広の「越後下向日記」には「アフゲンの舟橋」と書かれている。

五八年後に上杉謙信は、府内大橋（往下橋・逢岐橋）に橋銭を課しているので、この間に船橋から桁のある橋に替わっていったのであろう。

脇道にそれるが、―応化川に架かる橋にまつわる物語も多くあるが、その一つ「五智国分寺の琵琶法師」は、琵琶法師が検校になるための冥加金を国分寺で盗まれ、改心しての帰路、応化橋の上で突然目が明く。五智如来の加護として戻ってみると、目が見えないと泣き叫ぶ、冥加金を盗んだ旅の僧の姿があったという話である。

このように、川を越えて未知なる世界へとつなぐ橋を聖なるものと見て来た人たちに対し、橋を大勢の人が往来することに着目して橋銭を課すということは、物語の中世から近世への転換を意味しているのかもしれない。

いずれにしても多くの商人が行きかい、宿があり、応化川には桁のある橋が架かっている直江の津が想像できる。

それでは、一行がどのような道をたどって奥州から直江の津まで来たのであろうか。

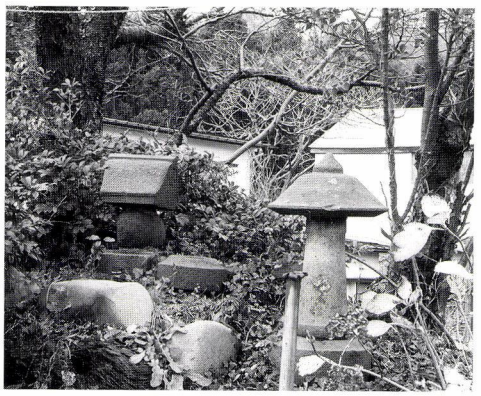
陽は陽谷に立ち出で、扶桑を照らし、日も暮れ端になりぬれば…、

という直江の浦での冒頭の場面に、それを解くカギがある。「あれに見えたる黒森の下に、逢岐の橋と申して、広い橋のござある」という女の言葉から想像すると、応化川（関川）を前にして夕日が一行の顔を照らせば、阿賀野川を下るか、三国峠を越えてきたと考えられる。あくまで物語の世界であるが、「源入」のあたりが「直江千軒」ということになる。一方、信濃から北国街道を歩めば、一行の背中を夕日が照らし、今の直江津が「直江千軒」になるはずである。

森鷗外「山椒大夫」の冒頭、「越後の春日から今津へ出る道」を歩く四人は、春日山下の加賀街道を歩いたのであろう。

鷗外は明治一五年、軍務で東京から新潟まで歩いているが、三月八日高田を発ち徒歩で直江津を通過している。その日記「北遊日乗」に、「高田を発つ道の上なる雪少しく融けたり」と歩みを進め、五言古詩を詠んでいる。

「森鷗外『北遊日乗』の足跡と漢詩」（安川理香子）に拠って訳すと、「高田を発つと、道は山すそを緩やかに曲がりくねりながら続いている。厳しい寒さだが、踝まで雪に埋まるような悪路で汗が顎を滴り落ちる。旅人を乗せた馬が通り過ぎ、荷を背負った魚売りの婦人がやっ



乳母嶽神社　居多神社北参道





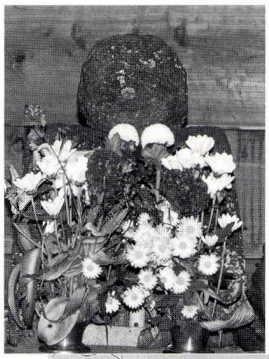
上　明治時代の加賀街道

下　関川河口の安寿と厨子王の供養塔と森鷗外文学碑

て来て、すれ違っていく。突然、怒り狂ったような波の音が聞こえ、驚いて目を上げると、鉛色の空の下に荒波が逆巻く冬の海があった。この海の遥か彼方に遠い昔の歴史を留める島がある。（順徳帝の）陵は荒れ果てているのであろうか、（荒波を眼前にして）哀れを誘って余りある。その佐渡島はどのあたりであろうか。大鷹が寒風に舞って飛び去った」。この鷗外の体験が反映されていると思われる。

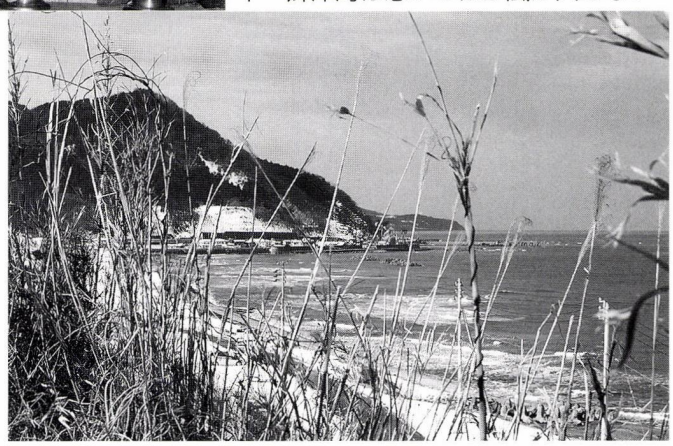
困り果てる一行の姿を見ていた人を売っての名人山岡太夫は、親子は応化川（関川）河口の「下の渡」を渡る浜路を行くか、逢岐橋を渡る道を行くかと思案する。

山岡は逢岐橋を目指すことになるが、直江の津には、応化川を渡る道が少なくとも二つあることが分かる。



左　山岡神霊位像　妙国寺・高田寺町

下　郷津湾は思いのほか風が入らない



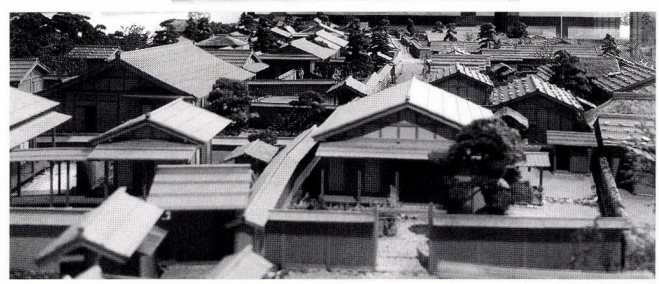
さて、一行は山岡太夫にだまされて、東西の人買い船に売られる。うばたけは「賢臣二君に仕えず、貞女は両夫に見えず、二張の弓は引くまい」と言い放ち、念仏を唱えながら離れていく二艘の船の間の海に身を投げる。これは直江の津が日本列島の東西の接点であることを意識していることに他ならない。

また、「太夫がよき小船一艘持って有る間、沖まで漕ぎ出だし、便船乞うて参らすべし」や二艘の舟が「五町ばかり類船するが、十町ばかりも行き過ぎて、北と南へ舟が行く」という場面は、直江の津を出た小舟が海岸に沿って漕ぎ、郷津湾で外洋船に乗り換える様子を表し、泊と津の関係を物語るものであると見る研究者もいる。

能「婆相天」で見る直江の津

平成一一年に復曲された「婆相天」も室町時代に作曲





直江の津をイメージできる一乗谷遺跡

されたもので、直江の津が舞台になっている。

斯様に候者は東国舟の船人にて候、順風吹きいでて、越後の国直江の津に舟を乗らばやと存じ候…。是は西国舟の船頭にて候…。

と、東西の船が久しぶりに直江の津を訪れる。二人の船人は「専ら人を商い申し候」者で、西国の船人は、昔は人商いをやっていたが、「上より御成敗正しきにより」と、この頃はやっていないと言う。東国の船人も、もっともな話だが、

当津へ舟をつけ左衛門殿に門出を祝われ候へば、行く末の商い成就仕り候…。

と、密かに二人に人を売ってくれと問の左衛門に頼む。

「問」（問丸）とは年貢の委託運送や回漕業を営む総合商社のような機能をもった業者のことで、取引のある船頭や商人の宿泊もあったといわれている。直江の津はこのような湊と物流機能を持った都市であったことが推測できる。

物語は、問の左衛門の下に奴婢の母子がおり、先の東西の人買いに子どもが売られる。姉は東、弟は西の舟に乗るが、浜に残る母に向かって互いの舟に乗ってくれと叫ぶ。母はどちらの舟に乗っても恨みが残るとして、離れていく二艘の舟のあいだの海に身を沈める。

そこへ千手観音が現れ、

いかに婆相天、母おば弘誓の舟にうかべて仏所に送り、二人の子供をば富貴の家にほこらせ候へ。

と、婆相天に命じて物語は終わるが、両方の舟のあいだに母が身を沈めるのは、うばたけの入水もそうであるが、仏の加護が働く場所が西でもない東でもない所でなければならず、物語の舞台を直江の津としたのは、東西日本の接点〈境界〉として十分に意識してのことであろう。



能「婆相天」公演
初演後まもなく演じられなくなり、平成11年10月9日上越文化会館を会場に、500年ぶりに上越出身観世流シテ方永島忠侈師によって復曲上演された。13年には国立能楽堂でも上演。

弁慶が想像する直江の津

源義経の一代記である「義経記」巻第七の冒頭の「判官北国落の事」は、頼朝の追手を逃れ、いよいよ藤原氏を頼って奥州平泉を目指して逃避行が始まる段である。

義経一行は、都落ちの道を修験道ゆかりの寺社が多い北陸道とし、出で立ちは山伏姿とする。義経はじめ弁慶、常陸坊など山伏の所作を心得たものばかりであるが、

どこ山伏と問わんずる時は、
どこ山伏とか言わんずる。

という質問に弁慶が答えて、

越後国直江の津は、北陸道の中途にて候へば、それより此方にては、羽黒山伏の熊野へ参り、下向するぞと申すべき。それより彼方熊野山伏の羽黒に参るぞと申すべき。

つまり直江の津より西ならば、羽黒山伏の熊野参詣の帰り、東なら熊野山伏が羽黒山参詣への途中だと言えばよいということである。

これは直江の津が日本の地理的な東西の接点というのみならず、羽黒山伏と熊野山伏の接点であり、異文化の接点と言うことを物語るものである。

一行は北陸道を進み、「如意の渡（高岡市伏木の小矢部川）にて義経を弁慶打ち奉る事」を過ぎ、「かくて岩戸の崎をも出で給いて、越後国の府、直江の津花園観音堂」に着く。

この寺の本尊は八幡太郎義家が安倍の貞任を攻める〈前九年の役〉の戦捷祈願に奉納した「源氏重代の御本尊」であり、直江の次郎という有徳の者に鎧を三十領を与えて建立したものである。

いよいよ「直江の津にて笈探されし事」の段である。

一行は花園観音堂で一夜を明かすことになり、義経一人を残して弁慶以下は直江の津のまちへ食料の調達に出る。

花園観音堂は現在の観音寺で、高田開府に伴って寺町に移った華園寺の観音堂であったといわれている。寺地は広大で直江津大神宮のあたりまであったようである。寺には今も義家・義経ゆかりの品が残されている。

直江の津で源義家が登場するお伽草子に、奥州五十四郡と北陸七ヶ国を賜り陸奥守となった源義家が、妻に迎えた〈まんじゅのまえ〉に対する〈直江の次郎〉の長年の奉公に、褒美として「直江の庄」を与え庄司とする「まんじゅのまえ」という直江氏発祥の物語がある。

さて、国府の守護は鎌倉へ上っていて不在。観音堂に山伏一行が入ったという噂を聞いた代官はらう権守が、

直江の津への旅



「勧進帳」の安宅関の場面　小松市安宅


如意の渡し　高岡市伏木


小矢部川の伏木と新湊間を往来する「如意の渡し丸」
（航路は廃止されている）





上　花園観音堂の歴史を伝える観音寺
　　手前の池は兜を投げ込んだと伝えられる「兜池」
右　花園観音堂があったと伝えられる華園寺（現在は高田寺町）

浦の者どもを催して、……網人どもを先として、理非もわきまえぬ奴原（やつばら）が二百余人観音堂を押巻き…。と、義経を詰問していると、弁慶があわてて戻り、笈の中に入った武具を羽黒へ奉納する権現像と言い張る弁慶と権守との丁々発止の問答は、歌舞伎「勧進帳」を思わせる。

結局、問答に負けた権守は、「笈をすすぎ候はんに、いくら程の物の要り候ぞ」と、金品を差し出すことになってしまい、翌朝、一行は直江の湊から船に乗り込み奥州へと向かう。

面白いのは、一一月三〇日と一二月一日に売り出される「かわたりもち」は、高田地区でも直江津地区でも上杉謙信が川中島で犀川を渡るとき、将兵に餅をふるまって士気を鼓舞したのが由来とされている。しかし直江津地区のごく一部では、義経一行が橋の畔の茶店で餅を食べて追手をやりすごしたことから、難を逃れる餅として「かわたりもち」になったという説が伝えられている。

幸若曲舞（こうわかまい）「笈捜（おいさがし）」の直江の津

義経の奥州落ちは「笈捜」として幸若曲舞にもなっている。六渡寺（ろくどじ）の渡（わたし）（如意の渡）から放生津（ほうしょうづ）（射水市）を歩いていくと、

越後の国直江の津へ下る船こそ候いけれ、この船に便船し……、直江の太郎が宿所に一夜の宿を借り給う。

これを見た浦人が集まって評定して言うには、「当国の国府（こう）、善光寺へ参る道、総じて数多の道辻」、道辻つまり街道が交差する直江の津に、見知らぬ山伏が大勢着いたのはいかにも怪しいと、七、八百人もの浦人が、直江の太郎の家の前に「弓矢を帯し、ひしめいたり」ということになる。

「笈捜」では、義経が一人で応対をすることになるが、力及ばず合図のホラ貝を吹くと、弁慶があわてて駆けもどり、我々羽黒の山伏に向かって、「判官になれ、義経になれとは何事ぞ」、分けの分からないことを言うなら、いっそのことに「直江千軒を我らが住家（すみか）」、支配下にし



花園観音堂で笈を改められる一行（岩波古典文学大系より）

てしまうぞと脅して浦人を追い返してしまう。

その後、直江の太郎に船の手配をさせ、義経は礼に白鞘巻の腰刀を与えて直江の津を船出していく。

旅人が見た「直江の津」と物語の「直江の津」

「さんせう太夫」ほか多くの物語は、舞台の設定を平安時代末期にしているが、成立は室町時代とされている。それでは室町時代、実際に直江の津を旅した人たちは、どのようなまちの姿を見ていたのであろうか。興味を引くのは、彼らが見たのは、直江の浦でもなく直江の津でもなく、「越後府中」の姿である。

宗祇、堯恵、聖護院道興など、当時の多くの文化人が越後守護上杉房定・房能父子を訪れているが、その一人、万里集九は長享二（一四八八）年一〇月、「梅花無尽蔵」の旅で越後府中を訪れている。応化川の「下の渡」を渡って府中のまちに入り、「屋を連ねて塩を焼き、煙は自ずから垣となる」と、塩を焼く煙が立ち込め垣根のようになっていると府中の様子を伝え、従者は「桂を薪とす」と、物価高を集九に報告している。その後、集九は上杉房定に招かれ、至徳寺を宿所として、安国寺、山本の圓通寺、居多神社、国分寺を訪ねている。

また下って永禄六（一五六三）年九月、京都醍醐寺の僧が関東へ使いした「永禄六年北国下り遣足帳（けんそくちょう）」は、題名のとおり金銭の支出しか書いてないが、宿代やおやつの餅代、訪れる寺の案内人へ手土産に酒を買うなど、府中の賑やかな往来を髣髴とさせるものがある。

この三年前の永禄三年、上杉謙信が蔵田五郎左衛門に府中の監視を命じ、翌四年には上杉憲政から関東管領職を譲られる時期である。

右のような紀行文に見る府中の賑わいが、お伽草紙

越後府中を想像する



福井県の朝倉氏一乗谷遺跡は、越後府中と同じ時代に繁栄し、細川政元・冷泉為広の一行も越後府中への旅の途中滞在している。





「鶴の翁」では、

……三人うち連れ、急ぎ給うほどに、越後の国に聞こえたるなをえの津に着き給う。

ここに、大きなるみたちあり、城下の町賑わいて、商納市（いち）をなす……。

というような直江の津として展開する。

「直江の浦」や「直江の津」が登場する物語や越後府中のまちを歩いた紀行文を時代の前後を顧みず拾い読みし、その〈かたち〉を考えてきた。

なぜ、これほどまでに「直江津」は多くの古典文学に登場するのだろうか。

中村格氏は「中世における海運の発達と能―北陸の港湾を舞台とする作品を中心に―」で、直井の浦を舞台とする婆相天・信夫・竹の雪をはじめ、北陸・山陰の諸港湾とかかわる曲が少なくない。畿内・瀬戸内はともかくとして、都から遠く離れた裏日本沿岸の、しかも東西にわたる諸港湾まで能作者の視野に入っていたということは、この方面との交通、海運の発達とそれに伴う商品流通による中央との交流を抜きにしては考えられない、と述べている。

また恋田知子氏は、「お伽草紙『まんじゅのまえ』試論」で、「まんじゅのまえ」の鎧商人を「越後の国直江津の者」と設定することで、読者に人買いを想像させるのは、「直江津の持つ文芸世界でのイメージ」であると述べている。

この「文芸世界でのイメージ」については、岩崎武夫氏が「続さんせう太夫考」で指摘しているところである。

氏は、直江津が「廻船式目」に三津七湊として挙げられるのは、交易商港として鎌倉時代、すでに相当の重きをなしていたことが分かると述べたうえで、交易が盛んであったということは、必ずしも良港であったことを意味しない。直江津の場合は特にそうである、とも述べている。この―地理的要請にもかかわらず港湾機能が劣る―というのは昭和四〇年代まで続いた事実である。

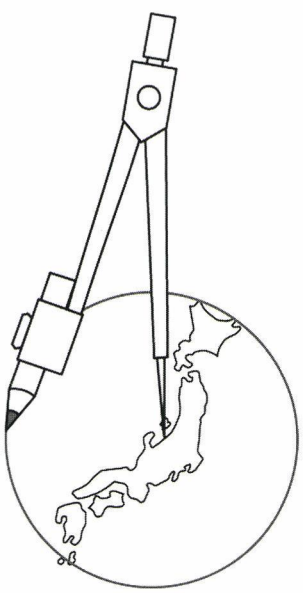
そして、直江津の地理的位置に着目し、人身売買の物語は、直江津が北陸道の中間に位置し、東西文化圏の接点という異質なものが併存する条件を基礎において成立し、主役は、登場人物というよりも「特殊な位置空間を占める直江津」であり、直江津という地方都市が抱え込んでいる境界的性格にあると指摘している。

今回は直江の津の〈かたち〉のみを見てきたが、直江の津を足掛かりにして展開する物語の先、たとえば「さんせう太夫」の丹後由良から摂津四天王寺、または直江の津に収れんする物語における「直江の津」の〈かたち〉も考えなくてはならないであろう。

以上は、中世の世界であるが、冒頭の与謝野晶子や吉野秀雄の近代のみならず、現代文学においても、「直江津駅」が境界性を帯びた空間としてとらえた作品を数多く見出すことができる。

ますます「直江の津」の謎が深まる直江の津である。

（郷土研究所・佐藤和夫）



国府――春日山――府中――直江津の空間を駆ける

春日山城と越後府中 2

春日山城国史跡指定八〇年によせて

小島幸雄

はじめに ～三大城郭の町～

前号では、春日山城そのものというよりも越後府中の意義について述べた。頸城平野が陸上・水上交通の要所であり、二千年以上も前から物流の拠点としてその地位を守ってきたことから国府が設置されることとなった。さらに、水上交通路の発展は、交通の要衝として西と東の接点として境界都市の発生を手助けし、春日山城というシンボルが付加された越後府中という、東国を代表する都市となっていった。

中世から近世に移行する過程では、時の権力者が注目する都市となり、日本海に面した福島城が、そして徳川幕府が諸藩に命令する形で、全国的にも大型に属する高田城が築かれたのである。

今号では少し踏み込んで、戦前に国が行った「史跡指定」から見える春日山城を考えてみたい。

城郭の史跡 ～一九四五年まで～

七四回目の一二月八日がやってきた。戦前は、戦争という大義に向けて、私たちの祖先が残してくれた文化遺産も、史跡として指定されたようだ。それを示しているのが、前号で紹介した「戦前の国指定史跡の城跡一覧」である。一覧そのものは本号では掲載していないので、「直江の津」三六号の二六ページを参照していただきたい。

一覧から読み取れることは、昭和九年あたりから城跡の史跡指定が飛躍的に増える傾向がみられることである。史跡指定とは直接関係しないが、昭和九年に足利尊氏を賛美した商務大臣が辞職に追い込まれるという事件が発生した。足利尊氏は建武の中興に際して後醍醐天皇を奉じて立ち上がったが、のちに反旗を翻して足利幕府を興し、南北朝両立のきっかけを作った武将である。いわゆる朝敵なのだ。朝敵を賛美するのはもってのほか、大臣の辞職はこんな意味を持つ事件だった。

史跡指定は、城郭から墓におよぶ。そして、それらは

間違いなく南朝方の武将とその関係史跡であった。真っ先に指定されたのは楠木正成の城、千早城と赤坂城である。まさに、足利尊氏と戦って後醍醐天皇を守ろうとした武将の城だった。昭和九年は、「神皇正統記」で南朝の正統を唱えた北畠親房の城や、これも建武の中興の忠臣新田義貞の太田金山城、そして、上杉謙信が歌を詠んだことで有名な（？）七尾城の指定にまで踏み込んでいったのである。

春日山城が国の史跡となる

「甲種合格」。

徴兵検査ではない。文化財が国のレベルか否かを決する際に下した判断である。春日山城は「甲種合格」だったので、国の史跡として指定されたのだ。

七尾城が指定された翌昭和一〇年、ついに春日山城が史跡として指定されることになる。指定の理由は、「上杉謙信の居城として著名である」ということだ。前年には謙信公が歌を詠んだということで七尾城が指定されており、春日山城の史跡指定は時間の問題だったのであろう。同年には、楠木正成の墓のある白山平泉寺や、南部氏の拠点であった九戸城も指定された。

では、春日山城がなぜこの時期に史跡になったのか。

戦前の史跡指定は顕彰主義といわれるが、まさにそのとおりであり、開戦前のおよそ七年間は南朝方の武将、いわゆる忠臣の遺跡が指定されていたのだ。ではなぜ、そのジャンルに含まれない謙信公の居城がそれらと一緒の時期に指定されたのであろうか。答えは明快で、謙信公は、二回の上洛で正親町天皇と後奈良天皇に拝謁を許されたほどの武将であった。これが顕彰主義というもの



上　平泉寺への道　福井県勝山市
下　平泉寺の楠木正成墓所
中世に巨大な宗教都市を形成。「義経記」などにもその名が現れる。
昭和10年に「白山平泉寺城跡」として国指定。平成9年指定区域が追加され「白山平泉寺旧境内」に名称を変更。

なのだ。

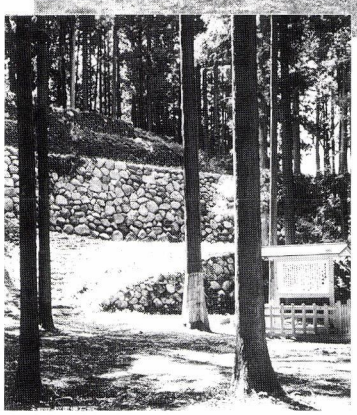
また、謙信公は軍神として崇められていた。戦上手で知られていて、二代にわたる天皇に拝謁を許された武将、謙信公は、武士の中でも別格の存在だったのだろう。軍神であり忠臣の謙信公は、顕彰するに最も適した人物であったことは言をまたないのである。謙信公がそのような存在になったのは、幕末に広まった尊王思想によってだと考えている。多くの武将は、鎌倉幕府以来征夷大将軍になって幕府を開き、政治の実権を握ろうとした中で、謙信公は敵に塩を送った、侵略戦争はしなかった、などなど、極めて異質な武将として描かれていて、南北朝の忠臣と同等の、いやそれに勝る武将として評価を得ていたのであろう。

春日山神社においでになった方は、「春日山神社」の御影石の大きな石碑をご覧なっているだろう。石碑の揮毫は東郷平八郎である。春日山神社の祭神は上杉謙信公で言わずと知れた軍神である。東郷は連合艦隊司令長官であり、春日山神社の創立が明治三四年、日露戦争が三七年である。神社の境内に日露戦争の戦利品と思える大砲などが置かれているのは、日露戦争に勝利した記念に奉納されたのであろう。

何気なくそこにある身近なものに、歴史の一場面が隠されている、当たり前のことだが、私たちの周りには多くの歴史の証人が息づいていることに気付きたいものだ。

「春日山神社」の石碑でもう一点注目すべきことがある。この石碑は、昭和一二年に建てられたものであることは背面に刻まれた文字から明らかである。ところが、東郷の年譜を見ると昭和九年にはすでに亡くなっていて、建てられた年に書かれたものでないことは明らかだ。いつどのような経緯で揮毫されたのかを調べる暇はない

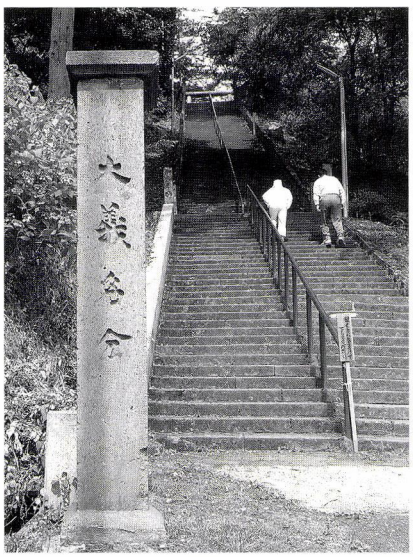




七尾城址の碑（写真・七尾市文化課）
能登畠山氏の居城として、天正５（1577）年、上杉謙信に囲まれるまで 169 年間にわたり能登を治めた。
謙信も堅固な要害ぶりと眺望を「絵像に写し難き景勝」と褒めている。春日山城とともに日本名城に選ばれている。



「上杉謙信公古城趾春日山ノ全景」大正初期の絵葉書（直江津・加島楼発行）
撮影は明治末年と思われるが、大正期の写真集などにも散見する。



鈴木荘六揮毫「大義名分」
春日山神社石段下の両脇にある

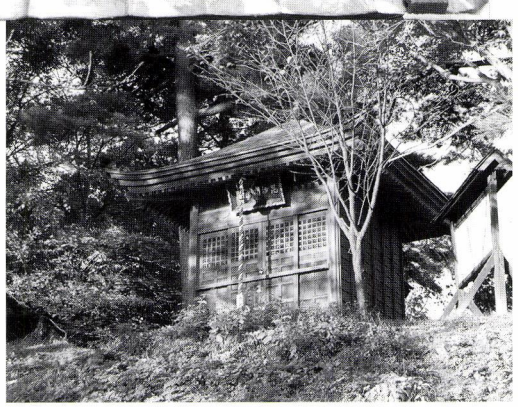
日露戦争の戦利品か





春日山神社境内に建つ東郷平八郎元帥揮毫の碑





毘沙門堂の掲額「毘沙門天」
揮毫の陸軍大将鈴木荘六は三条市出身、日清・日露戦争に従軍。

が、石碑の建てられた昭和一二年は盧溝橋事件があり、「国体の本義」が編纂された年でもある。少し毛色の違った事柄を上げれば、文化勲章が制定されたのも昭和一二年であった。

このような経過は、まさに日本が戦争に突き進んでいた時代の遺産であることは間違いないのだ。そして、今の我々がそれに学び、戦争を繰り返さない正しい選択をすることも忘れてはならない。

南部学シンポジウム

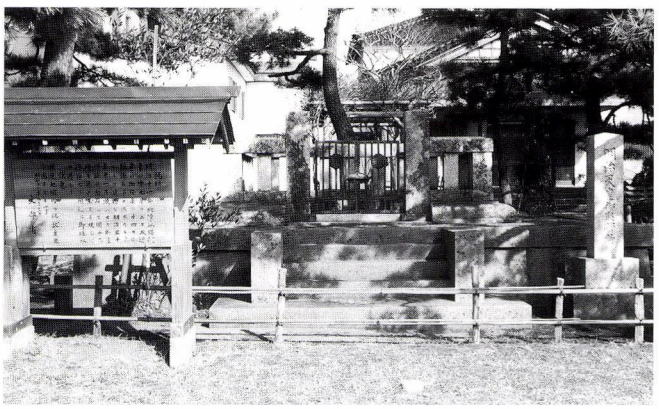
平成二六年一〇月、青森県南部町で「南部氏」のシンポジウムが開催された。春日山のことを話してほしいといわれて参加したが、私にとってはとても収穫の多いシンポであり、楽しい旅となった。なんと、南部氏は南朝と北朝を使い分けていたことに気付かされたのだ。正直、

シンポより南部氏の調査が楽しかったくらいだ。

南部氏の最初の史跡指定は九戸城の昭和一〇年である。六月七日であるから、春日山城より二か月早く指定されたのである。ところが、同じ南部氏の城である聖寿寺館は平成二年にやっと指定にこぎつけたのである。なぜ、このようなことが生じてしまったのだろうか。

驚くことに、聖寿寺館は南部氏でありながら北朝を名乗っていたのだ。同族でありながら、片や九戸城（南朝）、片や聖寿寺館（北朝）を本拠としたのだ。理由は推測にすぎないが、明らかに家を守るため、家系を存続させるために南朝と北朝に分かれて戦って、どちらの朝廷が勝っても南部氏は安泰である道を選んだのであろう。

当然、三戸南部氏を名乗る聖寿寺館の南部氏は戦前には北朝として館跡が国の史跡に指定されず、南朝を名乗った九戸の南部氏の館は国の史跡指定を受けたのである。



明治天皇聖跡　明治天皇御駐泊の跡
明治 11 年の 9 月、往路の 12 日、帰路の 24 日、柿崎区浄善寺に宿泊された。
今でも厳重に玉垣に囲まれ門扉には鍵がかかる。

筆者は、土地の人たちは当然南部氏の南北朝使い分けを知っているものと思っていたが、目を丸くして聞き入ってくれたのには驚いた。

実は、筆者が史跡と戦争に関心を持ったのは相当前のことで、おそらく昭和も五〇年代後半、年齢は三〇代前半と記憶している。明治天皇の聖跡について調べたことがきっかけである。今でも時間があれば調べ、文化財を見学する巡検の際にも注意を払っている。

著名な考古学者の一人で今はもう他界されてはいるが、佐原真という研究者がおられた。彼は戦争に強い関心を寄せ、「人間が始めた戦争は、人間が終わらせることができる」という強い信念を持たれていたという。平和を求めるために遺跡から戦争の痕跡を明らかにし、平和な社会を求める手段としたのかもしれない。

一覧には含まれないものに、戦前に史跡の指定を受けた明治天皇の「聖跡」がある。

「あれ、それならうちの町内の神社あるよ」とか、「昔の役場の敷地にあったよ」とか、思われる読者もいらっしゃるのではないだろうか。

「うちの屋敷にあるよ」という方もおいでだろう。これは戦前の一時期に全国で一斉に指定されたもので、明治天皇が行幸された場所に建てられたものである。明治天皇は明治一一年北陸道を巡幸している。その際立ち寄られた場所が聖跡として指定されたのだ。しかし、敗戦によって戦後すべてが指定解除された。なお、それらの維持管理については公費の支出が禁じられているものの、現在もあちこちで御影石の行幸碑を見ることができる。

建国記念の日と風土記の丘

建国記念の日は、言うまでもなく二月一一日と定められている。当たり前のことを書いて恐縮だが、建国記念日ではなく、建国記念の日としたのは国会での審議の過程で修正したことによるものだそうだ。

紀元節とは、神武天皇が橿原宮で即位した日であり、「日本書紀」の記述を採用して決めたのだそうだ。建国記念の日を決めるに際しても、それと同じ日の二月一一日と定められている。

ところで、紀元節は明治天皇の聖跡碑同様に戦後、昭和二三年に廃止された。しかし、廃止から三年後の昭和二六年にはすでに紀元節のような国の始めに関する記念日の制定を望む声が上がっていたとされている。その後何度も国会に提案されたが採択されず、一五年の歳月をかけて昭和四一年に国民の祝日の一つとして法律にのることとなった。しかし、一月一日のように法律そのものに日の記載はなく、政令で二月一一日と定められている。

史跡等を活用したものに「風土記の丘」がある。新潟県にはないが、隣の富山県と山形県には設置されている。風土記の丘はこれまで一六か所が作られたとされていて、全国で最初に開園したのは宮崎県西都原古墳群を中心としたものである。

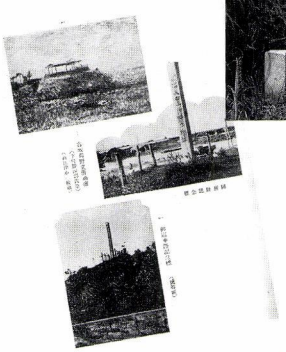
学生の頃、富山県の立山風土記の丘を尋ねた。あまり印象が残っていないものの、唯一忘れることができないのは、ニホンカモシカとの出会いである。風土記の丘というから歴史に関するもの、遺跡が保存されていると思って訪ねたのであっけにとられ、動物園に来てしまったのかと思うくらいだった記憶がある。インターネット



明治天皇聖跡碑
明治天皇新潟県（北陸）御巡幸 60 年を記念して昭和 11 年 9 月 25 日八千浦村教育会が建立。
明治 11 年 9 月 25 日に新潟の復路、休憩された。日本海を望む地に建っている。



明治天皇岩戸御野立所郷津海岸の「歴史の道しるべ」の近くに建っている。



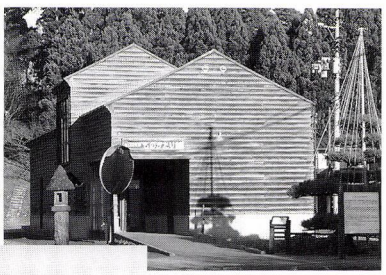
明治天皇ご巡幸 60 年を記念して、当時の新潟県立直江津農商学校交友会誌「交友会報」（昭和 13 年刊）が、直江津における歓迎の模様を 50 ページにわたって特集している。

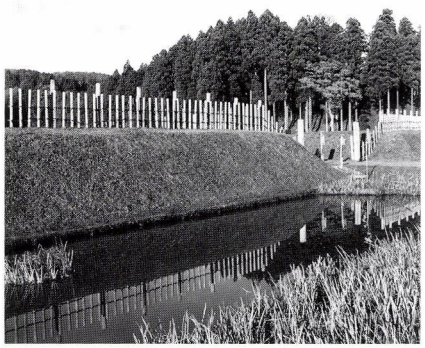
で調べると、はじめはカモシカ園だったというから、風土記の丘イコール遺跡というのは、筆者の偏見といえるかもしれない。

しかしながら、最初にオープンした風土記の丘が宮崎県の西都原古墳群を中心としたもので、宮崎県は神話に言うニニギノミコトが降臨した高千穂があり、島根県には八雲立つ風土記の丘があるに及んでは、筆者の偏見だけで片付けるのはいかがかと思うのである。なお、風土記の丘の第一号は昭和四一年に設置されている。

歴史は無いものねだりができない。私たちは身の回りに何気なく存在する歴史の証人たちに敬意を払って生きていかなければならないと思う。

春日山城跡を風土記の丘にしようという計画もあったらしい。具体的にはならなかったのは、春日山があまりにも広大で、整備に年数も費用もかかるということであったと聞いた。春日山城は大きいので、中途半端に整備するよりも、長く時間をかけても将来につなげる整備が求められたのかもしれない。





春日山城ガイダンス施設「春日山城跡ものがたり館」と復元された総構

春日山城の整備

風土記の丘では具体化しなかった、というよりも春日山城の大きさから、将来にゆだねられた整備が具体化するのは、昭和五〇年代後半である。

春日山城跡は、昭和一〇年に国の史跡に指定されて以来、昭和四九年に初めて追加指定を受けた。場所は、今、ものがたり館が建っている周辺で、史跡広場として市民に公開されている。三九年間指定範囲が拡大されなかった理由は、春日山城があまりに広大で、どこまでが春日山城であるか確定されなかったからである。昭和四〇年代初めから春日山城の調査が進み、監物堀と呼ばれる長さ一・二kmの堀が総構（そうがまえ）と認識されたことで範囲が確定したのである。

整備は、追加指定された地点から開始された。昭和五二年から発掘調査が開始され、昭和六〇年に入って基本計画が示されて、平成元年に具体化されている。しかし、現地に整備のクワが入ったのはもう少し後で、平成五年からである。追加指定から二〇年の歳月を要したことになる。整備は、土塁と堀を復元し、広場として活用できるようにした。春日山城をガイダンスする施設としてものがたり館を併設している。ものがたり館の名称は、歴史はストーリーを大切にしなければならないという意見によってつけられたもので、学芸員は語り部にならなければならないという考えと同一のものだ。

フォーラム「謙信・景勝と春日山城」

現在の春日山城を考える時、もっとも大切な画期となったのは、「フォーラム　謙信・景勝と春日山城　現在・過去・未来」の開催であろう。フォーラムは上杉氏会津移封四〇〇年と上越教育大学創立二〇周年の記念事業として、上越教育大学と上越市が共催で行ったものである。

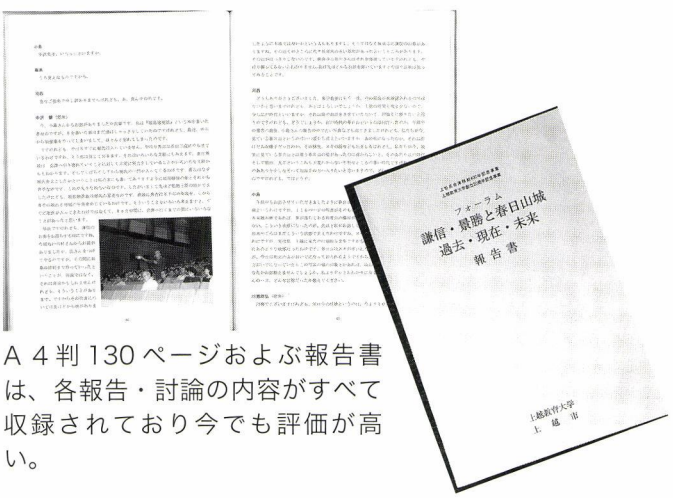
フォーラムは、平成一〇年にリージョンプラザ上越コンサートホールを会場に行われた。一七年も前のことゆえ一言一句記憶にあるわけではないが、午前一〇時から一七時までの間に、午前中に報告五本、午後は討論を二本行うという長丁場のものとなった。報告も近世史あり、中世史あり、はたまた美術史あり、もちろん考古学も文化財保護論ありで、この種のフォーラムとしては異質なものとなった。

フォーラムは、近世から中世の扉を開いていく、という切り口で議論が進められた。見えているものから見えないものを推論する、上杉氏が幕末まで藩主を勤めた米沢の城下町を切り口に、春日山城と城下町を推理しようとしたのである。美術史の川村氏（上越教育大学）からは、近世米沢城と城下町から謙信のイメージと春日山城が最盛期にどのような城であったかが提起された。また、浅倉氏（上越教育大学）からは江戸時代の謙信の御堂（墓所）と上杉家の廟所が、角屋（すみや）氏（米沢・上杉博物館）からは上杉家に伝来する古文書が紹介された。考古学は、このフォーラムでは付録のような存在だった。と同時に、考古学が今後春日山城とどう向き合っていけばいいかを学ぶこととなった。





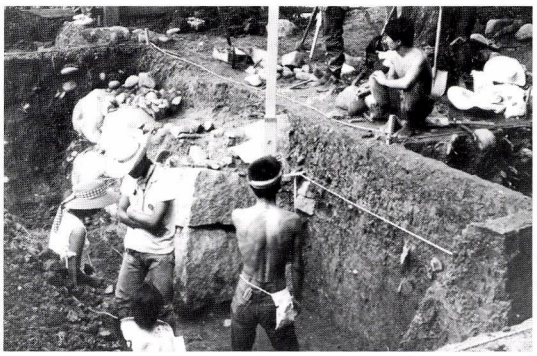
上　平成10年10月17日に行われたフォーラム会場。討論では会場全体での討論が行われた。
下　フォーラム翌日行われた春日山城跡見学会
（写真・いずれもフォーラム報告書より）

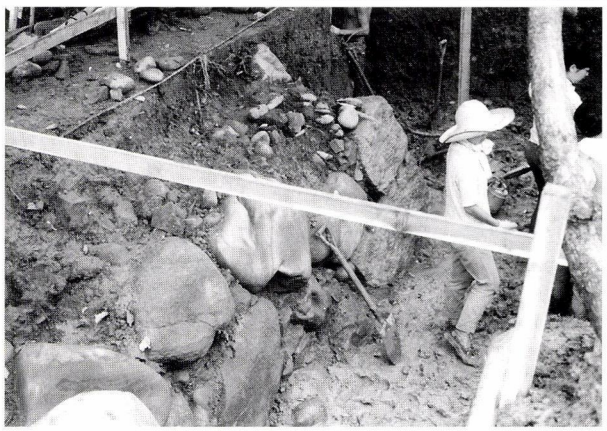


A４判130ページおよぶ報告書は、各報告・討論の内容がすべて収録されており今でも評価が高い。

春日山城のイメージは、フォーラムを境に大きく舵を切ったといっても過言ではない。いわゆる中世城郭論では理解できない、城という概念だけでは理解しがたい山城であることが、問題提起されたのである。

謙信の御堂がどこにあったのか、不識院はどこか、米沢城の二の丸にあった寺院群はどこにあったのかなどなど、今ある屋敷の名称では理解できない事柄がたくさん出てきたのであった。今後に課題を多く与えてくれたことが成果だったということになるのだろうか。そして、それらの課題は考古学という土地そのものを研究対象とする学問に解明がゆだねられたのである。





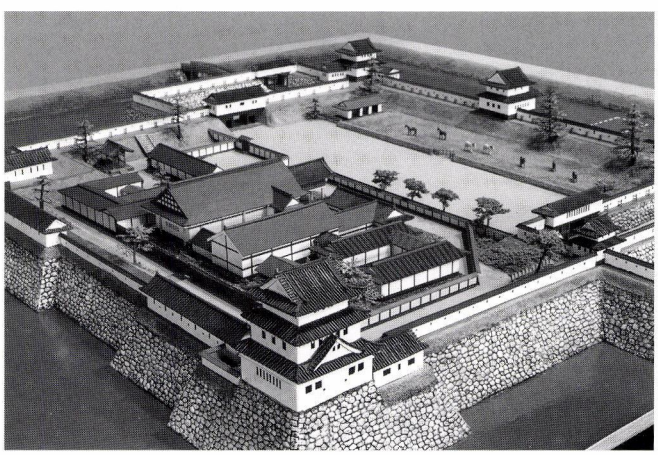
昭和41年から4年次におよぶ発掘調査で、大手門の石垣や野面積みの石垣の面影を残す巨石が確認された。

山城御停止につき
～春日山城から福島城へ～

春日山城築城の歴史は難しく、これまでも多くの方が検討されたが、これといった明解な答えは出ていない。ここでは廃城の経過をたどってみよう。

春日山城が廃城になったのは、慶長一二年とされてきた。これは、その年に福島城が完成して堀忠俊が移っているので、異論をはさむものではない。ところが、福島城の築城開始とその理由については、慶長一二年説と五年説があり、これまでは一二年が主流であった。というよりも慶長五年説が取り上げられることはなかった、といったほうがより正確かもしれない。

中沢肇先生はその著書『越後福島城史話』において、「大日本史料」の慶長一二年に堀忠俊が築城して移った



地域の歴史を掘り起こし福島城を世に出そうと結成された〈福島城を愛する会〉の人たちによって制作された福島城ジオラマ。愛する会の意気込みが伝わる出来である。

という記事を引用し定説として示しながらも、慶長五年に築城を開始している節があることを強調した。寺町の本誓寺に所蔵されている史料と、春日神社文書などを引用して慶長五年説を展開したのだ。では、なぜ五年なのだろうか。なお、中沢先生以外にも五年説の提唱者はいた。

上越市史で藤木久志先生とたびたびお会いしていたころ、山城がなぜなくなったかという話題になった。春日山城に話題がおよぶのも必至で、先生は「慶長一二年ですよね」と言われた。筆者は、中沢先生の前掲書を引合いにだし、慶長五年に山城廃止令で福島城に移ったらしいことをお話しした。藤木先生は秀吉の山城停止令に関心をお持ちであったのでその話で盛り上がり、高田市文化財調査報告書のコピーなどをお渡しした。山城停止令については門外漢であるので、詳しくは、『城破りの考古学』（藤木久志・伊藤正義編　吉川弘文館二〇〇一）を参照されたい。

筆者が慶長五年説に惹かれたのは、あれだけの巨大な福島城で、なおかつ石垣を本丸二の丸に廻している城が、早々短期間でできあがることなど考えられないということからであった。物理的に不可能ではないかというのが本心であった。確かに、高田城は福島城より大きいが石垣がなく、築城は容易と思われたのだ。福島城の周囲には石が無く、遠方から運ぶ必要がある。矢代川や名立川が最も近い石の川であるので、一〇㎞以上の距離がある。石垣を積むなど、一年ではできるはずがないのだ。

そうなると、なおさら山城停止令が気になる。春日山城の廃止の理由は、やはり秀吉、もしくは家康なのだろうか。慶長三年とすれば、秀吉の存命中であり秀吉といえるのだが、五年は秀吉が死んで関ヶ原の合戦の年であ

フォーラム当日のプログラムを見ると、以降このような広範にわたる分野の研究者が集う、春日山城跡の研究会は行われていない。このフォーラムは、春日山城の単なる「城跡」に、新しい視点を与えた画期的な出来事で高く評価すべきものである。また、討論では会場の民間の研究者からも鋭い指摘が出され、会場は終始熱気に包まれていた。

上杉氏会津移封四〇〇年記念事業
上越教育大学創立二〇周年記念事業
フォーラム「謙信・景勝と春日山城　過去・現在・未来」
日時　平成一〇年一〇月一七日（土）午前一〇時
会場　リージョンプラザ上越　コンサートホール

あいさつ
上越市教育長　斎藤弘
上越教育大学長　加藤章

報告1「謙信御堂と上杉廟」
浅倉有子　上越教育大学助教授　近世史

報告2「謙信・景勝の真言密教寺院」
川村知行　上越教育大学助教授　美術史

報告3「上杉家宝と上杉文書の伝来」
角屋由美子　米沢市立上杉博物館学芸員　中世史

報告4「焼物で比べる春日山城と一乗谷」
小野正敏　国立歴史民俗博物館助教授　考古学

報告5「春日山の保存と再生」
小島幸雄　上越市教育委員会学芸員　考古学

＊

討論Ⅰ「歴史に見る春日山城の過去・現在」
各報告者
アドバイザー　藤木久　立教大学教授　中世史
峰岸純夫　中央大学教授　中世史

討論Ⅱ「春日山城の未来」
パネリスト　宮越馨　上越市長
加藤章　上越教育大学長
アドバイザー　藤木久　立教大学教授　中世史
峰岸純夫　中央大学教授　中世史
各報告者

司会　大悟法滋　上越教育大学教授　植物学
河西英通　上越教育大学助教授　近代史
中西聰　上越市教育委員会学芸員　美術史

る。本当に悩ましい年に築城を始めた説があるものだ。

筆者は、春日山城から福島城への移動を、上杉権力から堀権力への移行を示すものと考えていることから、堀氏は入封後間もない時期に春日山城の廃止を決定し、その準備を始めたと解釈すべきと考えている。したがって、上杉氏を否定し、府中を含めて福島城へ移すことが堀氏の政権維持の作法であったのであろう。

山城にふさわしい景観

「上杉氏の城だから、杉を植え（上）過ぎ（杉）た！」これは、フォーラムでの発言だ。これが直接のきっかけとなったわけではないが、フォーラムの成果の一つが杉の間伐を進めよう！　という意見の集約だろう。この事業は今でも継続され、今年春先には頂上部の遺構が平坦と崖を繰り返す山城の遺構としてよみがえった。

あるとき、春日神社の風間宮司とお会いした。

「春日山よくなりましたね！　春日小学校に行って、屋上から写真撮ってきましたよ！」

という、うれしい言葉を聞くことができた。一〇年以上間伐を続けた結果が出た瞬間でもあった。

筆者の春日山城の記憶は、昭和五二年からのものだ。その年の三月三一日をもって富山市を辞職して上越市に移った筆者は、初めて謙信公居城としての春日山城に登った。それ以前は調査に来たことが一度あったが、本丸に登った記憶があいまいで、休憩所のところでクマに間違われたのが唯一の春日山の記憶である。その頃は、頂上の本丸や天守台は松がうっそうと生い茂り、夏でも涼しかったと記憶している。汗をかいて頂上に着くと、体が冷えて寒かった思い出がある。

杉もたくさん植林されて、周りの景観が遮蔽されていたようだった。一緒に発掘していた地元の方々に聞くと、春日山城の中腹まで横井戸から出てくる水を利用して稲作が行われていたこと、春日山の水田が機械化できなかったので水を好む杉を植えたことを話してくれた。もう一点、春日山城を保存するため大正時代に財団法人春日山史蹟保存会ができたとき、将来の史跡保存と会の維持のために杉を植えて、財源にしようとしていたということだった。しかし、現代は杉を伐採しても市場の需要がないため放置されるばかりであり、城の保全に悪影響（斜面の崩壊を誘発する。）を及ぼすことが懸念されたため、杉を間伐して景観保持と斜面保護にのりだしたのであった。

杉を間伐すると、二年目に目を見張る景観が訪れた。伐採した遺構の平坦部はもちろん、斜面に至るまで一面



大正末から昭和初めにアマチュア写真家によって撮影された春日山城跡山頂。「春日山節」の春日山頭、松吹く風に…を髣髴とさせる。

にカタクリが群生したのだ。春先にあたり一帯をピンク色に染めるカタクリは、春日山に人を集めることに大きく作用し、杉の伐採から生まれたうれしい出来事だった。しかし、逆にシャガがどんどん減っていった。カタクリとシャガは、生育環境が全く逆だったのだ。カタクリは太陽を好み、夏の間は地中でじっとしていて広葉樹が芽吹きしない春先の一時に花を咲かせて、周りに葉が茂るときには葉枯れてしまう。シャガは太陽を嫌い、年中日の当たらないスギ林で生きる。杉の伐採ひとつでこんなことも教えてくれるのだ。

一本銀杏はなぜ残った

現在の春日山を象徴するのは、山頂直下にある一本の銀杏の木である、といっても過言ではなかろう。昨年の秋、銀杏は黄色く色づき、春日山の晩秋の景観を演出した。本丸斜面の山桜、銅像のモミジの赤、本丸から直江屋敷の赤松の緑、と四季折々に春日山城の景観は色で表現される。

筆者が退職する前に始まった杉の伐採は、本丸周辺から開始した。その過程で、杉に隠れて一本の銀杏が杉林にあることが判明した。

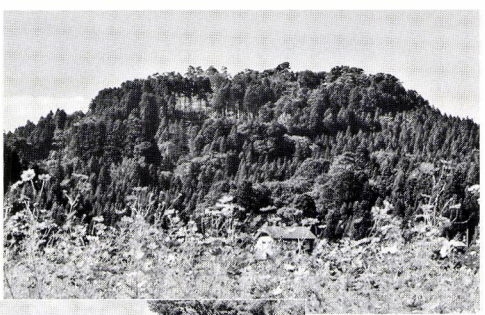
「そうだ。この銀杏を残して将来の春日山城のランドマークにしよう」。上越市学芸員の中西さんと語り合ったことが昨日のことのようだ。

それが大きくなり、昨年あたりからランドマークの役割を果たすようになったのだ。そして、葉が散っても、二の郭の斜面に黄色のじゅうたんを敷き詰めたようになり、これがまた結構なのだ。残してよかった、と痛感している。

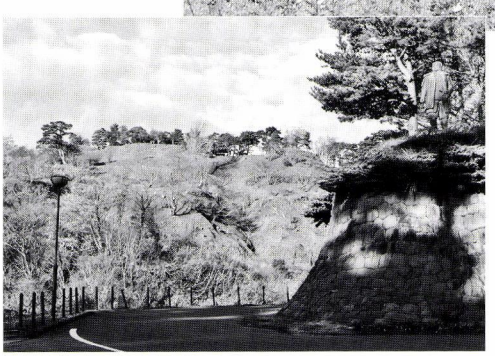


杉を伐採して現れたカタクリ





郭の輪郭が明確になり山桜が朝日に映える



上　平成14年撮影杉が鬱蒼としている
下　目がくらむような斜面が現れた

この銀杏は、少し色づく時期が遅い。ほかの銀杏が葉を落とす頃に色づくようだ。来年の秋、ぜひ注意してみてほしい。

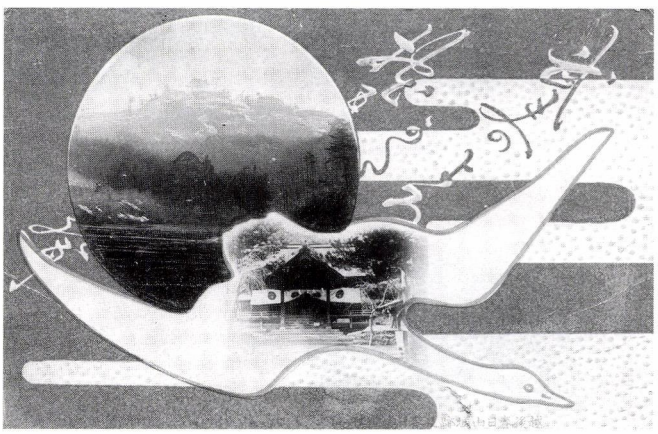
一〇〇年前の春日山城をめざして、そして一〇〇年後に春日山を伝えるために

春日山城が、美しくあった頃の山城の姿を見せていたことを知れるのは、高田開府三〇〇年祭の時に印刷された絵葉書によってである。屋敷の平坦とそれを作り出した時にできた崖がきれいに見えているのだ。この絵葉書をいつごろ見たかは記憶が定かではない。気にならなかったのか、それすら記憶がない。しかし、山城はこんな姿に見えるべきだ、と思ったことだけが印象に残っている。杉を間伐しようという発想は、このような山城を見たい、だったら何をすればいいのだろう、こんな簡単な問いかけから出たものだ。中西さんが常々お話しされているように、一〇〇年前の春日山に戻す作業、それが杉の間伐をはじめとする春日山にとって不要な木の伐採作業なのだ。

春日山城を一〇〇年前に戻そう。これを突き詰めると、一〇〇年後に春日山城を伝えようということになる。大切なことは、文化財を後世にいかに良好な状態で伝えるかであって、今が最高では伝えたことにならない。最高を維持するため、これからも多くの人から春日山城に心を寄せていただき、様々な観点で語り合うことで、より良い方策が生まれてきてくれることを願っている。

（上越市専門学芸員）

古写真で見る 春日山城跡



謙信公三百三十年祭記念の絵葉書
高田中学校謙信祭事務所発行
明治40年4月29日の記念スタンプがある



大手道から本丸跡を見上げる
（「新潟県写真発展号」大正4年刊より）



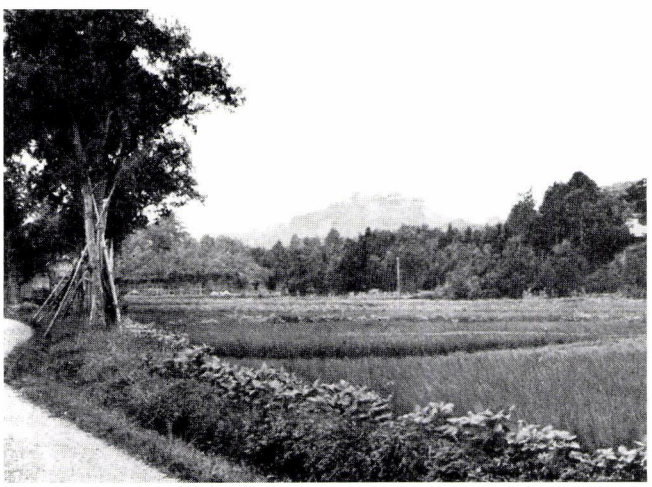
春日山神社　明治 34 年創建
（「新潟県写真発展号」大正４年刊より）



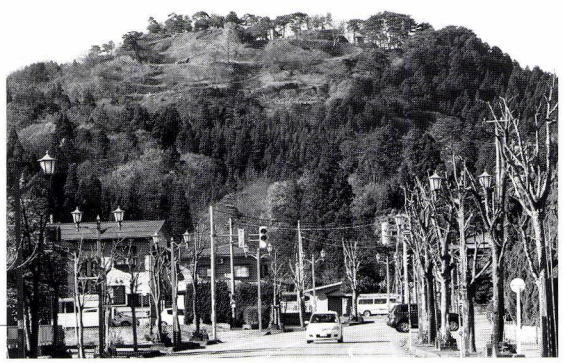
夏目漱石なども訪れた五智海岸の和倉楼の絵葉書
大正 10 年代から昭和初期に発行されたもの



本丸の井戸などが載る「越佐大観」（昭和３年刊）



「直江津商工案内」（昭和９年・直江津商工会議所刊）の口絵に載る春日山城跡の遠望同じ写真が昭和 13 年に発行した高田商工会議所発行の「観光の高田」にも掲載されている。撮影位置は不明。



上越大通りから見上げる春日山城跡（平成 27 年 12 月８日）

歴史は「今日（きょう）」への手紙

残しておくべきもの
伝えておくべきもの

関東管領 上杉憲政を顕彰する人たち

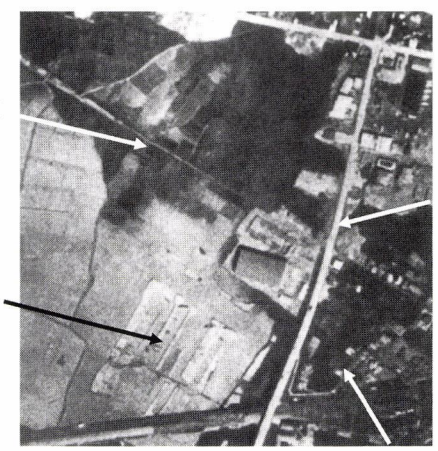
上越大通りの御館橋陸橋から見て北西方向にある「御館公園」は、天文二一（一五五二）年、北条氏康に攻められた上杉憲政が上杉謙信を頼って逃れてくると、謙信は厚く保護し、憲政のための御館を造営した場所として伝えられている。しかし永禄四（一五六一）年三月謙信は、憲政から鎌倉鶴岡八幡宮で山内上杉家の名跡と関東管領職を譲られ、謙信の管領職の政庁として御館を造営したのではないかという説が近年では有力になっている。

上杉憲政は、上杉景勝と三郎景虎が上杉家の家督を争った「御館の乱」では景虎方に付き、景虎が立てこもる御館が落城すると、景虎の子道満丸を伴って和議の仲裁に春日山城へおもむく途中、現在の春日中学校の北西に広がる四ツ屋砦で景勝方に攻められて亡くなっている。

御館の乱で憲政のとった行動について「平井城址探訪」（関東管領平井城址保存会刊）では、「（憲政は）越後で上杉謙信の庇護のもと館を作ってもらい、平穏に暮らしていましたが、謙信の死後は上杉景虎に味方して上杉景勝と敵対しました。上杉景虎は、宿敵北条氏康の実子にもかかわらず味方した、そんなところにも憲政の人間としての甘さがあるといわれています」と憲政を分析し、続いて「上杉景勝と直江兼続は敵対した関東管領であった憲政の亡骸を丁重に扱い、上杉謙信の棺とともに会津からさらに米沢まで運んで弔った」と書いている。

御館跡は北陸線敷設に伴って部分的に破壊されたが、周辺の田んぼから一段と高くなっており、昭和三九（一九六四）年から始まった宅地造成による緊急発掘で、内郭が東西一三五・南北一五〇ｍの全国屈指の館であったことが確認されている。その一部を再発掘調査が可能なように埋め戻し「御館公園」として保存され、今日に至っている。

この御館公園に関東管領上杉憲政公顕彰碑を建立しようと、長年にわたり活動を繰り広げてきた人たちがいる。富岡製糸場の世界遺産登録で賑わう群馬県藤岡市の関東



発掘直前の御館跡
かまぼこ状の建物はパチンコシルクロード

管領平井城址保存会（会長松原三友氏）の人たちである。

平井城（藤岡市西平井）は関東管領上杉家が代々居城にしてきたが、享禄四（一五三一）年、関東管領に就任した上杉憲政も居城としている。

その平井城址保存に努めてきた保存会員や関係者が藤岡から多数訪れ、一〇月三一日、念願の顕彰碑を御館公園の一隅に建立した。

碑は全て保存会が負担して制作され、中世城郭の研究家で高田開府四〇〇年記念実行委員長の植木宏氏が撰文している。

碑の石は、国の天然記念物に指定されている藤岡市の三波石峡で産出する「三波石（さんばせき）」で、高さ一・八、幅一・五mの巨石が使用されている。

三波石は上越市内の庭に多く見られる青緑色の石で、石英の縞が入った庭石とそっくりなのである。じつは、三波石峡からホッサマグナを横切って紀伊半島から四国まで、全長一〇〇〇kmの三波川変成帯と呼ばれる帯でつながっており、上越市内で紀州（和歌山県）青石、阿波（徳島県）青石、伊予（愛媛県）青石などと呼ばれて珍重されている石は、三波石と同じものなのである。

上越市内のこれらの石は、おそらく船の喫水を下げるためのバラスト石として運ばれて来たのであろうが、三波石帯の始まりの石と最先端の石がこの地でつながっていることに驚かせられるとともに何か因縁めいたものを感じる。





上　関東管領上杉憲政公顕彰之碑
　碑文は「藤岡市と上越市の絆を未来に伝えることを祈念してこの地に碑を建立した」と結ばれている。

下　春日山総鎮守春日神社風間宮司によって神事が執り行われた。



市内でよく見られる伊予石

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

日の出を見て今日一日を念じ、海を見て航海の無事を念じ、日の入りを見て明日を念じる。

海外の悲惨な事件を聞くたびに静かなこの土地を誇りに思う。

新しい年を担当する〝申〟です。チョットお神酒を頂いて赤い顔をしていますがヤル気満々です。上に上にと飛び跳ねて皆さんと一緒に頑張りますので、よろしくお願いします。（梅田）

目　次

特集　物語に見える「直江の津」のかたち　4
国府―春日山―府中―直江津の空間を駆ける
春日山城と越後府中　2
上越市専門学芸員小島幸雄　18
巻頭エッセイ・このまちのこと　野本　幸　2
歴史は　関東管領上杉憲政を
顕彰する人たち　29

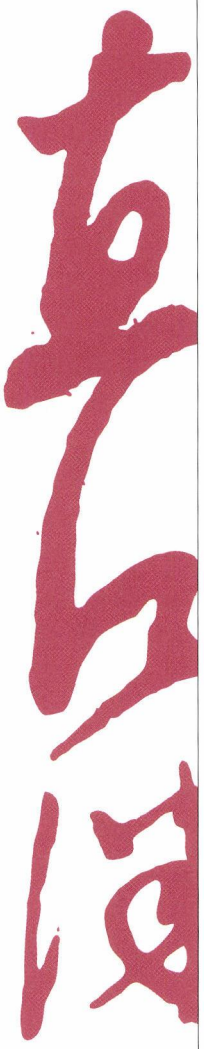
「直江の津」
第一二巻二号　通巻三七号
発行日／平成二七年十二月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／荻野順次郎
問合せ先／上越信栄社
電話〇二五（五四五）〇二〇二
上越市中央二―八―一
制作協力・北越出版

2015・2号

直江の津

発行／平成二十七年十二月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン





須布価格／五〇〇円